（４）明石港と福沢諭吉

安政２年（１８５５）の２月中旬のある日、下関の船場屋の持ち船が明石港に接岸した。船頭の制止を振り切って一人の青年が降り立った。朝の８時頃のことである。後ろをふりかえりもせず、一路山陽道を東へ向かう。のちに明治天皇もめでた舞子・須磨という景勝地にも足をとめず、歩きに歩いて、その日の夜１０時頃、兄三之助の勤務先である大坂中島の中津藩蔵屋敷にたどりついた。そこは自身の誕生地でもあった。この青年こそ、新しい時代に飛翔した、若き日の福沢諭吉（２２歳）である。

彼はなぜに明石の波止場に降り立たねばならなかったのか。

話は一年前にさかのぼる。ペリー来航とともに、豊前中津藩でも、オランダ流砲術の必要性が論議され、たまたま兄三之助の長崎行きの機会に同道することになった。そして桶屋町の光永寺に居候の身となり、勉学に頭角をあらわす。諭吉の能力に嫉妬した奥平壱岐は、家老である父（与兵衛）に、諭吉の母が病気との偽手紙を送付させ、諭吉は長崎から急ぎ中津に帰る。奸計と知った諭吉は、江戸で遊学を志し、中津の商人鉄屋惣兵衛の為手紙を巧みに行使して、船場屋の船に運賃後払いの約束で、大坂行きの船便に乗りこむ事ができた。下関を出帆してから１５日目に明石につき、上述のような事態となった。

大坂で諭吉を迎えた兄は、江戸行きには同意せず、蘭学の勉強なら、大坂にも立派な先生の存在を聞き出し、３月９日に、緒方洪庵の適塾に入門することとなった（会田倉吉著『福沢諭吉』）。明石に上陸した諭吉の姿を目撃した人も、この青年の姿からは、次の時代に雄飛する人物とは想像できなかっただろう。

明石港

日本歴史学会会員 茨木 一成